

『ヤンキー、プリントを届けに行く』

登場人物

城ヶ崎拓海

(17) 柴崎北高のヤンキー

市野瀬美子 (みこ)

(17) 柴崎北高の不登校の女子生徒

ばあば

(65) 美子の祖母

寺原先生

(52) 城ヶ崎と美子の担任

原田優斗

(23) 柴崎北高の伝説のヤンキー

原田ユカリ

(23) 優斗の妻

明石ガク

(16) 城ヶ崎の後輩ヤンキー

黒崎剛太

(17) 花道南工業高校のヤンキー

早川龍一郎

(17) 城ヶ崎の友人

○ 地方都市の風景

街の奥には山が見える。

N 「時は1990年。この街には二つの高校がある。一つは、柴崎北高。通称、北高」

○ 北高・外観

正門には“柴崎北高等学校”の文字。

そして、窓ガラスは割れている。

N 「創立は1980年。共学で、偏差値は32。特に強い部活などもない。しかし、この北高は、県内でも屈指のヤンキー高で、卒業後は、地元の工場や造園業、家業を引き継ぐ者が多く、中には極道の道に進む者もいる。地元愛が強く、仲間を大事にするヤンキー高だ」

○ 南高・外観

正門には“花道南工業高等学校”の文字。

窓ガラスは割れている。

N 「そして、もう一つは、花道南工業高等学校。通称、南高。ここも共学で、創立は1950年と北高よりも歴史のあるヤンキー高だ。北高と同じく偏差値は32で、特に強い部活はない。長らくこの街で一番のヤンキー高だったが、北高の台頭により、その座は脅かされており、生徒たちは危機感を抱いていた」

○ 道

原付バイクに乗っている北高のヤンキーたち。

N 「北高と南高のヤンキーたちには、天下を取るという野望がある。しかし、その前にまずは、自分の学校で番長にならなければなれない」

○ コンビニ・前

うんこ座りで、煙草を吸っている南高のヤンキーたち。

N 「そして、それぞれの高校で番長になった奴を中心に、仲間を編成して、北高と南高の戦いが始まる。この戦いは“天下統一戦”と呼ばれ、北高が創立されてから、始まった伝説の戦いだ」

○ 空地

T 「一年前」

北高と南高による殴り合いの喧嘩が行われている。

N 「この街に生まれた男は、幼い頃から、北高か南高に進学する事が決まっており、番長になる事を、最初の目標としている。そして、この天下統一戦で勝つと本物の男になれるのだ」

○ 北高・教室（朝）

T 「月曜日」

騒がしい教室内。

漫画を読んでいる男子生徒、化粧をし

ている女子生徒など。

教壇に立っている担任の、寺原友和

(52)は黙ったままだ。

N「そして、この男も天下統一戦で、自らの名前を歴史に残す事に、命をかけていた」

教室の後方のドアから、入って来たの

は、城ヶ崎拓海(17)だ。

城ヶ崎の登校に、クラスメイトは静かになる。

城ヶ崎、一番後ろの真ん中に椅子に座り、足は机に乗せる。

N「城ヶ崎拓海。この男が北高十代目番長だ」

寺原先生「おい、城ヶ崎！お前、また遅刻だぞ」

城ヶ崎「だから、何だよ」

寺原先生「何だよって。いいか、社会に出るとなお前みたいな奴は通用しないぞ！これは、城ヶ崎だけじゃない、お前ら全員に言っているからな！」

城ヶ崎、鼻で笑う。

寺原先生「何だ？何がおかしい？」

城ヶ崎「社会って、ろくに社会も出てねえ奴が何を偉そうにぬかしてんだよ」

寺原先生「何だと」

城ヶ崎「だいたいよ、先生って奴は、ロクな奴がいねえんだよ。大学出てから22、23で先生、先生って言われるから、勘違いするんだよ」

寺原先生「お前・・・」

城ヶ崎「ていうか、お前、いい歳して援交なんかしてんじゃねえよ。この前、お前が桜ヶ丘の女子高生とラブホから出て来た所を俺は見たんだよ」

寺原先生「何・・・」

女子生徒からは、悲鳴が聞こえる。

女子生徒A「えー、キモっ。先生ってロリコンなの？」

寺原先生「な、何を言っているんだ」

城ヶ崎「お前らも、スカート短くするの止めた方がいいぜ」

女子生徒A「えー、見ているとか？」

城ヶ崎「そんなんじやねえよ。こいつぐらいの変態になると、盗撮してんだよ」

女子生徒たちは、悲鳴を上げる。

寺原先生「静かにしなさい！と、とりあえず、プリントを配るから、必ずご両親に渡す事。いいな！」

寺原先生、前の席に座っている生徒たちにプリントを配るが、生徒たちは騒がしくしている。

城ヶ崎、鼻で笑う。

寺原先生、窓際の一番前に座っている女子生徒Bにプリントを5枚渡そうとするが、一番後ろの席が空いている事に気づき、4枚にする。
プリントを受け取った女子生徒Bは、プリントを汚い物に触るような感じで触る。

それを見た寺原先生は、

寺原先生「・・・おい、城ヶ崎」

教室内は騒がしく、寺原先生の声は全然、聞こえない。

寺原先生「城ヶ崎」

女子生徒B「何、ブツブツ言ってるの。気持ち悪い」

寺原先生、とても大きな声で、

寺原先生「おい、城ヶ崎！」

静かになる教室内。

城ヶ崎「・・・何だよ。変態、せ・ん・せい」

寺原先生「・・・このプリントを届けに行け」

城ヶ崎「は？」

寺原先生「窓際の一番後ろの席の、市野瀬さんの家に、このプリントを届けに行け」

城ヶ崎「何で、俺が。ていうか、市野瀬って誰だよ」

寺原先生「お前は、何も分からないと思うが、市野瀬さんは、ずっと学校に来ていない。

私が、一週間分をまとめて、市野瀬さんの家に届けに行っていたが、もうそれもめん

どくさくなってきた」

城ヶ崎「おいおい、みんな聞いたか？これが職務怠慢ってやつだよ。しょうがねえな、

先生って奴は。ただの税金泥棒じゃねえか」

寺原先生「お前が私に何を言おうが、もうどうでもいい。とにかくこのプリントを届けに行け」

城ヶ崎「行く訳ねえだろ。ていうか、自分で取りに来いって、その市野瀬って奴に言うておけ」

寺原先生「お前、遅刻と無断欠席がどれぐらいあるか、知っているか？」

城ヶ崎「いちいち数えてねえよ」

寺原先生「遅刻117回。無断欠席34。このままだと、卒業出来ないぞ」

城ヶ崎、鼻で笑う。

寺原先生「お前、卒業後は、バイク屋で働く事になっているんだろ」

城ヶ崎「何で、お前が知っているんだよ」

寺原先生「いいのか。卒業、出来ない事が

“原田さん“にバレても”

城ヶ崎「・・・」

城ヶ崎、舌打ちをして、寺原先生の元に向かう。

城ヶ崎「あゝ、めんどくせえ！」

城ヶ崎、寺原先生、向かい合って立つ。

寺原先生「今日から、一週間。お前には市野瀬さんの家にプリントを届けに行ってもらう。一日でも、それを怠ると、お前は卒業出来ない。分かったな」

城ヶ崎「・・・」

寺原先生「お前は何にも続かない、中途半端な奴だからな。出来るか心配だなあ」

城ヶ崎、寺原先生からプリントを奪い取る。

城ヶ崎「・・・上等だよ。やってやるよ」

タイトル

『ヤンキー、プリントを届けに行く』

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 市野瀬家・前（夕方）

城ヶ崎、バイクを停める。

美子の家は、3階建てで、この街で一番大きな家だ。

城ヶ崎、家の外観を眺めて、

城ヶ崎「金持ちかよ」

城ヶ崎、インターフォンを連打する。

城ヶ崎「早く出るよ」

家の中から、美子のばあば（65）が出てくる。

ばあば「はいはい、ごめんなさいね。どちら様ですか？」

城ヶ崎「柴崎北高等学校。第十代目番長、城ヶ崎拓海。担任からこのプリントを預かった。これをお前ん所の奴に渡して欲しい」

城ヶ崎、ばあばにプリントを渡す。

ばあば「ああ、美子のお友達ね。ありがとう

ね。ちゃんと、美子に渡しておきますから」

ばあば、プリントを受け取る。

城ヶ崎、原付バイクに座ると、

ばあば「せっかくだから、ゆっくりしていき
ますか？」

城ヶ崎「……ゆっくりしている暇なんかね

えよ」

城ヶ崎、原付バイクを走り出す。

○ 同・美子の部屋

市野瀬美子（17）は、カーテンの隙

間から、城ヶ崎とばあばのやり取りを

見ていた。

部屋にノック音がする。

美子「はい」

ばあば、入ってくる。

ばあば「美子、これ、お友達が持って来てく
れたわよ」

ばあば、美子にプリントを渡す。

美子「ありがとう」

ばあば「今日は、美子の好きなハンバーグだから、楽しみにしといてね」

美子「うん、ありがとう」

ばあば、部屋を出る。

美子、手に取ったプリントを見る。

美子「友達なんて、いないのに」

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ バイク屋（夜）

店主で、北高OBの原田優斗（23）

が、バイクの修理をしている。

城ヶ崎は、近くで見ている。

原田さん「（笑い）プリントを届けに行くとわなあ。何か、可愛いな」

城ヶ崎「笑いごとじゃないっすよ。それをしてないと卒業出来ないんですから」

原田さん「そうだな。せっかく北高に入学出来たんだから、卒業ぐらいしない」と

城ヶ崎「卒業しないと、ここで働かせてもらえないんだよね？」

原田さん「もちろんだ。中卒はダメだぞ。このバイク屋だって、別に儲かっている訳じゃないんだし、何かあった時に他の場所で就職出来なくなるからな」

城ヶ崎「うん」

原田さん「お前だって、結婚して子どもを育てていけないといけないんだからな」

城ヶ崎「うん」

原田さん「だけど、一週間って言うていたけど、天下統一戦は大丈夫なのか？」

城ヶ崎「大丈夫だよ、ただプリントを届けにいけばいいだけだから」

原田さん「そうか」

城ヶ崎「・・・今年の天下統一戦は必ず勝つ」

原田さん「・・・」

城ヶ崎「ねえ、俺にも触らせてよ」

原田さん「・・・うん？ああ、やってみるか」

原田さん、工具を城ヶ崎に渡す。

城ヶ崎、工具を受け取る。

原田さん「拓海、お前、本当にバイク屋になるのか？」

城ヶ崎「当たり前だろ。俺には、バイクしかねえから」

原田さん「・・・」

城ヶ崎、バイクをいじる。

城ヶ崎と原田さんの元に、原田さんの妻、原田ユカリ（23）が来る。

ユカリ「拓海君、どうぞ」

ユカリ、城ヶ崎にお茶を差し出す。

ユカリは、現在、妊娠をしている。

城ヶ崎「ありがとう。でも、いちいちいいのに。妊娠しているんだから」

ユカリ「拓海君は優しいね。どっかの誰かと違って」

原田さん「何だよ。俺だって優しいだろ」

ユカリ「何か、よく分かんない殴り合いなんかしないで欲しいな」

城ヶ崎「ユカリさんには、関係ないだろ」

原田さん「そうだな。拓海は優しいからな。」

お前はお前のままでいいんだよ」

城ヶ崎「・・・何だよ、それ」

○ 南高・正門（朝）

T「火曜日」

○ 同・校舎裏

椅子に座っているのは、花道南工業高

等学校四十代目番長、黒崎剛太（17）

黒崎の周りには、南高のヤンキー、5

0名程がいる。

黒崎の元に、情報収集係のヤンキーが
来る。

情報収集係「すいません、遅れました」

黒崎「おお、で、どうなんだ？」

情報収集係「今年の天下統一戦は、我が南高

が有利かと」

周りの南高のヤンキーたちから“おゝ”

という声上がる。

情報収集係「番長が早川龍一郎から、城ヶ崎拓海に代わってから、相手の戦力はかなり落ちていきます。統率も全く出来ていません」

黒崎「そうか」

情報収集係「城ヶ崎も、ここ最近は単独行動が多いですし、決戦当日も、一人で挑んでくるのではないかと思われます。そうなれば、今年の天下統一戦は、南高の勝利は確実です」

歓声を上げる南高のヤンキーたち。

黒崎「・・・うるせえ！（大声で）」

黙るヤンキーたち。

黒崎「南高の勝利じゃねえんだよ。俺の勝利なんだよ」

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 市野瀬家・前（夕方）

城ヶ崎、インターフォンを鳴らす。

手にはプリントを持っている。

家の中から、ばあばが出てくる。

城ヶ崎 「また、このババアかよ（小声で）」

ばあば 「こんにちは。番長の城ヶ崎さんですね」

城ヶ崎 「そうだけど」

ばあば 「今日も、何かあるんですか？」

城ヶ崎 「プリントを届けに来た」

ばあば 「あら、昨日に続いてごめんなさいね。

美子に、ちゃんと渡しておきますから」

城ヶ崎 「その美子って奴、呼んでこいよ」

ばあば 「え？」

城ヶ崎 「俺は、あんたにこのプリントを渡しに来たんじゃねえ。てめえのプリントぐら

い、てめえで取りに来いって言って来い」

ばあば 「はあ・・・ちよつと待っていて下さ

いね」

城ヶ崎 「勘違いするなよ、別に怒ってねえから。ちよつとイライラしているだけだ」

ばあば 「はい」

ばあば、ドアを閉めて、美子の部屋へと向かう。

城ヶ崎は、舌打ちをする。

城ヶ崎「あんな年寄りのババアに取りに行かせるなんて、どんな奴なんだよ」

ドアが開くと、美子が現れる。

美子「・・・」

城ヶ崎「お前か」

美子「・・・何ですか？」

城ヶ崎「何ですか。じゃねえよ。お前が学校に来ねえから、俺が、お前の家まで、わざわざプリントを届けに行く事になってんだよ」

美子「・・・そうですか」

城ヶ崎「そうですか？お前、喧嘩売ってんのか？」

美子「その喧嘩、買ったら殴るんですか？」

城ヶ崎「・・・殴りはしねえ。あいにく、女子は殴らねえって、先輩と約束したんでね。でも、俺が女子だったら、今ここで、お前

を確実に殴っている」

美子「・・・暴力はいけません」

城ヶ崎「ああ？」

美子「・・・」

城ヶ崎「いちいち、癩に触る事を言う奴だな。とりあえずよ、これ、渡したからな」

城ヶ崎、美子にプリントを渡す。

美子「ありがとうございます」

城ヶ崎、その場を離れる。

美子、ドアを閉める。

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 十字路（夕方）

原付バイクに乗っている城ヶ崎、赤信号で待っている。

少し遠くにある電柱を見る。

城ヶ崎「・・・」

× × ×

(フラッシュユ)

電柱に突撃する一台の原付バイク。

大破した原付バイクを見ている城ヶ崎。

地面に倒れているのは、城ヶ崎の親友、

早川龍一郎(17)

城ヶ崎「お、おい、龍一郎。大丈夫かよ」

早川、意識が朦朧としている。

早川「た、拓海・・・お前が番長になって、

天下統一戦で勝て。お、男になってくれ」

× × ×

城ヶ崎「・・・」

後ろの車にクラクションを鳴らされる。

城ヶ崎、原付バイクを走らせる。

○ 地方都市の風景(朝)

T「水曜日」

○ 北高・裏庭(夕方)

城ヶ崎、階段に座り煙草を吸っている。

手には、美子へと渡すプリントを持つ

ている。

城ヶ崎「ああ、めんどくせえ」

城ヶ崎、立ち上がると、裏庭に北高の
後輩ヤンキー4名が来る。

城ヶ崎「・・・」

その内の一人、明石ガク（16）が

「行こうぜ」と小さく言い、4人は引
き返す。

城ヶ崎「（舌打ちをする）」

○ 市野瀬家・前（夕方）

城ヶ崎、インターフォンを鳴らす。

家の中から、ばあばが出て来る。

ばあば「あー、城ヶ崎さん。こんばんは」

城ヶ崎「こんばんは」

ばあば「ちよつと、待っていてね」

ばあば、ドアを閉める。

城ヶ崎、ため息をして“早くしろよ”

という苛立ちからか、貧乏ゆすりの様
に足を動かす。

ドアが開き、中から美子が出て来る。

美子「こんにちは」

城ヶ崎「こんばんは」

美子「・・・」

城ヶ崎「引きこもりすぎて、時間感覚狂ったか？」

美子「引きこもりだからといって、別に一日中、寝ている訳ではありません。朝から、ちゃんと勉強はしています」

城ヶ崎「それは、それは大変ですね」

城ヶ崎、プリントを差し出す。

美子、プリントを受け取ろうとすると、

城ヶ崎が、手を引っ込める。

美子「・・・何ですか？」

城ヶ崎「いつも、この時間になったら、お前が出る。毎回、毎回、あのババアが大変だろ。年寄りには敬え」

美子「・・・はい、分かりました」

城ヶ崎、美子にプリントを渡す。

城ヶ崎「ていうか、何で、お前、学校に来な

いんだよ」

美子「何でって……」

城ヶ崎「……」

美子「……私が弱いから」

城ヶ崎「……」

○ 北高・廊下（昼）

T「木曜日」

○ 同・教室

寺原先生による社会の授業が行われて
いるが、学級崩壊が起こっている。

椅子に座り、机に足を乗せている城ヶ
崎は、ガムを噛んでいる。

城ヶ崎、空席になっている美子の席を
見る。

城ヶ崎「……（腕組みもしている）」

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 市野瀬家・前（夕方）

城ヶ崎、インターフォンを鳴らすと、
すぐにドアが開き、中には美子がいる。

城ヶ崎「早っ！」

美子「昨日、待っていると聞いていたので」

城ヶ崎「待っている。とは言っていない。お

前が出るって言ったんだ」

美子「・・・」

美子、無言で手を差し出す。

城ヶ崎「・・・ああ」

城ヶ崎、美子にプリントを渡す。

美子「ありがとうございます」

美子、ドアを閉めようとする、

城ヶ崎「お前が学校に来ない理由、分かった」

美子「え？」

城ヶ崎「俺らのクラス、完全に学級崩壊だわ。

あんな環境で勉強なんか出来る訳ねえ」

美子「・・・はあ」

城ヶ崎「俺は、ずっと引きこもっているお前
を馬鹿だと思っていたが、あれなら、家で

勉強している方がいいわ。お前、見るからに頭良さそうだもんな。大学とか行くのか」

美子「はい」

城ヶ崎「ああ、そう。まあ、頑張れよ」

美子「ありがとうございます」

城ヶ崎、その場を離れようとする、

美子「あの！」

城ヶ崎「あ？」

美子「私たちのクラスって、どんな感じなんですか？」

城ヶ崎「どんな感じって、普通のクラスだよ。

まあ、担任は変態だけだな」

美子「変態？」

美子、クスッと笑う。

城ヶ崎「・・・何がおかしい？」

美子「先生が変態。子どもたちを教育する立場の者が変態だなんて、何だか、おかしいですね」

城ヶ崎「・・・おかしくねえよ」

美子「あ、すいません」

城ヶ崎「・・・本来、教師っていうもんは、

お前みたいな奴と真摯に向き合い、寄り添うべきだろ」

美子「・・・はあ」

城ヶ崎「じゃあ、また明日な。美子」

美子「・・・あ、はい」

城ヶ崎、その場を離れる。

○ 同・美子の部屋

椅子に座っている美子、城ヶ崎から受け取ったプリントを手に持っている。

プリントには“子どもたちがよりよい学校生活を送るための講演会のおしらせ”と書かれている。

美子「・・・」

○ 地方都市の風景（朝）

T「金曜日」

○ 北高・廊下（夕方）

城ヶ崎、廊下にもたれて煙草を吸っている。

城ヶ崎の元に、後輩ヤンキー4人がやって来る。

城ヶ崎の事を避けているヤンキー4人組だ。

4人組の一人、ガクが、

ガク「城ヶ崎さん、ちよつといいですか？」

城ヶ崎「何だよ」

ガク「俺ら、1年の奴らで話をしたんですけど、今年の天下統一戦には出ない事にはしました」

城ヶ崎「・・・」

ガク「俺らは、早川さんを慕っていた訳で、別に城ヶ崎さんを、慕っている訳ではありませんし、1年の中には、番長が城ヶ崎さんの事に納得していない奴らもいます」

城ヶ崎「それは仕方ねえだろ。俺がナンバー2だったんだからよ」

ガク「だから、それが納得いっていないって

言っているんですよ。城ヶ崎さんって、こ
う言っちゃあれなんですけど、タイマンとか
別に強くないじゃないですか」

城ヶ崎「ああ？何だとテメエ！」

城ヶ崎、ガクの胸倉を掴む。

ガク「何すか？殴りたければ、殴っていいで
すよ」

城ヶ崎「・・・」

ガク「なんなら、ここでタイマン張って、俺
が勝ったら、北高の番長って事でいいです
か？」

城ヶ崎「・・・」

城ヶ崎、ガクの胸倉を離し、その場を
離れる。

ガク「逃げるんですか！勝負しましょうよ！」
城ヶ崎「プリントを届けに行くんだよ！」

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 市野瀬家・前（夕方）

城ヶ崎、インターフォンを鳴らそうとすると、ドアが開き、美子が立っている。

城ヶ崎 「はああ、ビックリした」

美子 「（クスッと笑い）バイクの音がしたんで」

城ヶ崎 「あ、ああ」

美子 「今日は何のプリントですか？」

城ヶ崎 「進路についてだよ。これ結構、大事なプリントだから無くすなよ」

城ヶ崎、美子にプリントを渡す。

受け取った美子は、

美子 「これ、書いて、変態教師に渡さなきゃいけないんですよね」

城ヶ崎 「まあ、そうだな」

美子 「・・・」

城ヶ崎 「（舌打ちして）渡すのが面倒くせえなら俺が届けてやるよ」

美子 「ホントですか？助かります。ありがとう

うございます！」

城ヶ崎「別に感謝する程の事でも無いだろ」

美子「城ヶ崎君は、進路はどうするんです

か？どんな夢を持っているの？」

城ヶ崎「俺はバイク屋になる。バイク屋になるのが、俺の夢なんだ」

美子「バイク好きなんだね。あのバイクかつ

こいもんね」

城ヶ崎「だろ！何だ、結構いいセンスしてん
じゃねえか。俺、バイク好きなんだよ！」

美子、微笑む。

美子「好きな事を仕事にするって、いいなあ」

城ヶ崎「美子は、どんな大学に行くんだよ」

美子「私は、看護大学に行きたいです。病氣
やケガで苦しんでいる人を助けたいです。

まあ、父親が医者っていうのも影響してい
るんですけどね」

城ヶ崎「なるほど、父親は医者か。なんで、
そんなに金持っているのか、気になってい
たんだよ」

美子「はい」

城ヶ崎「あと、気になるんだけど、お前みた
いな真面目そうな奴が何で、北高に入学し
たんだよ」

美子「北高しか入れなかったんです。実は、
中学の頃、私、全然勉強出来なくて、偏差
値は32ぐらいだったんです」

城ヶ崎「それって、バカなのか」

美子「かなり。宿題とかも全部、ばあばにや
ってもらっていたので」

城ヶ崎「お前、あのババアに負担かけすぎだ
ろ」

美子「だから、頑張りたいんです」

城ヶ崎「・・・」

美子「今度は、自分の力で頑張らなきゃいけ
ないんです。強くならなきゃいけないです」

城ヶ崎「・・・なんか、よく分かんないけど、
頑張れよ。話してみないと分かんない事と
か、あるんだな。美子なら何でもやれそう
だよ。頑張ろうとしている奴は応援したく

なる」

美子「・・・はい。ありがとうございます」

美子の元に、ばあばが来る。

ばあば「美子、夕飯の支度が出来たよ」

美子「うん」

ばあば「あ、城ヶ崎さん、こんばんは」

城ヶ崎「こんばんは。じゃあ、俺は行くわ」

美子「うん」

城ヶ崎、その場を離れる。

○ 同・玄関

美子、玄関のドアを閉める。

ばあばは美子に、

ばあば「城ヶ崎さんと仲が良いんだね」

美子「え？ああ、そうなのかな」

ばあば「城ヶ崎さんは、着ている服のサイズ

はあつておりませんし、言葉使いは少々、

乱暴だけど、綺麗な瞳をしていて、とても

魅力的な人だと思う」

美子「ばあばもそう思う？」

ばあば「うん」

美子「そうだよ、城ヶ崎君って、ヤンキー
だけど、とても優しい方だよ」

ばあば「私が美子ぐらいの年なら、きっと恋
を得ていたな」

美子「恋を得ていた・・・」

○ 北高・外観（夕方）

T「土曜日」

○ 同・職員室

城ヶ崎は立っている。

寺原先生は、椅子に座りテストの採点
をしている。

城ヶ崎「は？どういう事なんだよ」

寺原先生「どういう事も何も、今日は届けに
行かなくていいよ」

城ヶ崎「喧嘩、売ってんのかよ。早くプリン
トよこせよ」

寺原先生「よこせもなにも、今日はプリント

はないんだよ。配る物がないんだよ」

城ヶ崎、寺原先生の机を蹴る。

城ヶ崎「クソつたれ！」

寺原先生「おい！机に八つ当たりをするな。

これは市民の税金で賄っているんだぞ」

城ヶ崎「・・・」

寺原先生「それに、もう市野瀬さんの家にプ

リントを届けに行かなくていいから」

城ヶ崎「あ？」

寺原先生「もう充分やったから、いいよ」

城ヶ崎「・・・」

寺原先生「何だ？嬉しくないのか？」

城ヶ崎「・・・やっと、面倒な事から解放さ

たよ」

城ヶ崎、教室を出て行く。

○ 市野瀬家・美子の部屋（夕方）

美子、椅子に座り、勉強をしている。

家の外から、城ヶ崎が乗っているであろう原付バイクのエンジン音が聞こえ

る。

美子「あ！」

美子、シャーペンを置いて、部屋を出て行く。

○ 同・前

美子、家から出て来る。

市野瀬家の前を城ヶ崎が乗った原付バイクが通り過ぎる。

美子「・・・城ヶ崎君？」

○ 道（夕方）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。
サイドミラーを見ると、見送っている美子の姿。

城ヶ崎「・・・」

○ 北高・教室（朝）

T「日曜日」

○ 城ヶ崎家・拓海の部屋

城ヶ崎、煙草を吸いながら、漫画を読んでいるが、飽きたのか漫画を閉じて床に投げる。

城ヶ崎「・・・」

○ 市野瀬家・美子の部屋

美子、椅子に座り勉強をしている。
積みあげられた参考書の近くには、これまで城ヶ崎が届けてくれたプリントの束。

美子、シャーペンを置き、そのプリントの束を手取る。

美子「・・・」

○ バイク屋

城ヶ崎、バイクをいじっている。

○ 原田家・台所

バイク屋の2階は、原田さんとユカリ

さんの居住スペースとなっている。

城ヶ崎、手を洗っている。

○ 同・リビング

城ヶ崎、入って来る。

ユカリさんは、テーブルに饅頭とお茶を準備している。

ユカリさん「ほら、座って」

城ヶ崎「うん」

× × ×

城ヶ崎、饅頭を食べている。

ユカリさんは、お茶を飲んでいる。

ユカリさん「饅頭とお茶って、私も、おばあちゃんみたいだなあ」

城ヶ崎、クスッと笑う。

ユカリさん「今度、闘うんでしょ？」

城ヶ崎「うん。命かけてくるわ」

ユカリさん「そんなのに命なんかかけちゃって。あれでしょ？ただのドラゴンボールのパクリでしょ？天下一武道会だっけ？」

城ヶ崎 「天下統一戦だよ、間違えないで」

ユカリさん 「何でもいいよ」

城ヶ崎 「ユカリさんは、原田さんの天下統一

戦は見に行ったの？」

ユカリさん 「行く訳ないじゃん。あの頃、付

き合っていた事も、周りに隠していたんだ

から」

城ヶ崎 「何で？」

ユカリさん 「私が、南高だったから？」

城ヶ崎 「え？ユカリさんって、南高だった

の？」

ユカリさん 「うん」

城ヶ崎 「北高の男が南高の女子と付き合って

いいの？」

ユカリさん 「当時もね、なんかそれを気にし

て、あいつは周りに隠していたんだよ。別

に私は言っても良かったんだけどね」

城ヶ崎 「そうだったんだ。別に付き合っても

いいんだ」

ユカリさん 「当たり前じゃん！誰を好きにな

ろうが、誰と付き合うが、その人の勝手で
しよ」

城ヶ崎「・・・そうなのか」

○ 市野瀬家・美子の部屋（夕方）

椅子に座っている美子は、裁縫をして
いる。

○ 北高・教室

T「月曜日」

騒がしい教室内。

城ヶ崎、椅子に座っている。足は、机
に乗せ、腕組みをしている。

城ヶ崎「・・・（ガムを噛んでいる）」

教室の後方のドアが、大きな音を立て
て、倒れる。

女子生徒からは悲鳴が上がり、教室内
は静かになる。

城ヶ崎「・・・（ドアを見る）」

教室に南高のヤンキー5人が入って来

る。

その中には、南高の番長、黒崎の姿。

黒崎「よー、城ヶ崎」

城ヶ崎「何だ、コノ野郎」

黒崎「天下統一戦の挨拶をしに来た」

黒崎の取り巻きのヤンキーAが、

ヤンキーA「黒崎さんが、挨拶しに来た。感

謝しろよ」

城ヶ崎「・・・」

黒崎「明日の朝九時。場所は去年と同じ、あの空地だ」

城ヶ崎「・・・ああ」

黒崎「遅刻は厳禁だ。無断欠席は棄権とみなし、負け犬の烙印を押され、お前は一生、この街で生きていられなくなる。いいな？」

城ヶ崎「・・・上等だよ」

○ 同・廊下

寺原先生、城ヶ崎と黒崎の話聞いていた。

寺原先生「……」

教室から、南高のヤンキーたちが出て来る。

寺原先生「……お疲れ様です（小声で）」

○ 同・教室

静かな教室内。

城ヶ崎は、椅子に座り、足は机に乗せている。

寺原先生、入って来て、城ヶ崎に、

寺原先生「いや、随分と騒がしかったね」

城ヶ崎「……」

寺原先生「城ヶ崎君。お願いがあるんだけど、いいかな？」

城ヶ崎「何だよ？」

寺原先生「市野瀬さんの家にプリントを届けて欲しいんだが」

城ヶ崎「ああ。早くよこせよ」

寺原先生「それがね、まだプリントを作っていないくてね。おそらく明日の朝九時頃に出

来るんじゃないかなあ。あく、今日は徹夜をしないとなあ」

城ヶ崎「その時間は予定があるから無理だな。

お前が自分で届けに行け」

寺原先生「君がプリントを届けに行かないと、卒業は認めないよ」

城ヶ崎、椅子から立ち上がり、寺原先生の胸倉を掴む。

城ヶ崎「もう、卒業出来るんじゃないのかよ」

寺原先生「そんな事、言ったけなあ？」

城ヶ崎「ああ？」

寺原先生「いいかい、城ヶ崎君。社会っていうのはね、理不尽な事も我慢して受けいれなきゃいけないんだよ」

城ヶ崎「テメエ・・・」

寺原先生「どうしても、届けるのが無理なら、市野瀬さんに取りに来てもらうしかないかなあ」

城ヶ崎「・・・」

寺原先生「あ！でも、あの子は引きこもりだ

から、家から一步も出られないんだったね。

彼女は弱い子だから、きっと無理だろうな」

城ヶ崎、寺原先生の頬を殴る。

寺原先生、床に倒れる。

城ヶ崎「・・・あいつは、あいつは弱くなんかねえよ！」

寺原先生「・・・どうだろうね。人っていうのは、そんな簡単に変わらないもんだよ」

城ヶ崎「・・・」

○ 市野瀬家・美子の部屋（夜）

美子、椅子に座り勉強をしている。

外から、城ヶ崎が運転している原付バイクのエンジン音が聞こえる。

美子「！」

エンジン音は、消え、インターフォンの音が微かに聞こえる。

美子、部屋を飛び出して行く。

○ 同・玄関

美子、ドアを開けると城ヶ崎が立っている。
いる。

美子「城ヶ崎君。こんな夜にどうしたの？」

城ヶ崎「お前、明日学校に来いよ」

美子「え？」

城ヶ崎「ほら、あれだろ。家にずっといるのも飽きただろ。たまには、気分転換で外にも出るよ」

美子「・・・」

城ヶ崎「保健の先生に、聞いたんだけどさ、何か途中で無理になったら、保健室で休めるらしいよ」

美子「・・・」

城ヶ崎「それでも一応、授業は出席扱いになるらしい」

美子「城ヶ崎君は、明日学校に来るんですか？」

城ヶ崎「俺は、明日、大事な用事があるから、午後に来ると思う」

美子「じゃあ、私も午後から出席します」

城ヶ崎「それだとダメなんだよ。朝の九時ま

でに登校しないと」

美子「・・・ああ」

城ヶ崎「な、頼むよ。学校に来てくれ」

美子「何で、そんなに私に学校に来て欲しい
んですか？」

城ヶ崎「いや、それは・・・」

美子「・・・」

城ヶ崎「とりあえず、面倒くせえ事、考えな
いで学校に來い！分かったな」

美子「・・・は、はい」

城ヶ崎「美子は、弱くなんかねえ。大丈夫だ」

城ヶ崎、その場を離れる。

美子「・・・」

○ 地方都市の風景（朝）

T「火曜日」

○ 城ヶ崎家・拓海の部屋（朝）

特攻服に着替え終えた城ヶ崎。

城ヶ崎「・・・よし、行くか！オラァ！」

○ 市野瀬家・美子の部屋（朝）

制服に着替え終えた美子。

美子「・・・」

○ 道（朝）

城ヶ崎、原付バイクを運転している。

○ 北高近くの道（朝）

美子、ばあばと一緒に歩いている。

ばあば、足取りの重い美子を心配そうな表情で見つめる。

○ 空地近く（朝）

城ヶ崎、原付バイクを停める。

○ 空地（朝）

南高のヤンキー、30人程が集まっている。

その中心にるのが番長の黒崎だ。

南高のヤンキーの前に、たった一人で

美子、教室の前で立ち止まっている。
教室に一步入ろうとしたり、引っ込め
っては、入ろうとしたりの繰り返しを
する。

○ 空地（朝）

南高のヤンキー、29名が地面に倒れ
ている。
傷だらけの城ヶ崎は、フラフラになり
ながら立っている。
黒崎は余裕の表情で、城ヶ崎の前に立
っている。

城ヶ崎「・・・て、て、天下まで、あともう
一步だぞ！（声を振り絞って）」
黒崎、持っていた金属バットで、城ヶ
崎の頭にめがけてフルスイングする。

○ 北高・正門（朝）

正門の前に立っている、ばあばの元に
美子が来る。

美子「・・・ばあば」

ばあば「大丈夫だよ、よく頑張ったねえ」

美子、ばあばに抱きつく。

美子「ごめんね、ばあば。ごめんね」

ばあば「ううん、大丈夫。大丈夫」

美子の目からは涙がこぼれる。

○ 同・教室

騒がしい教室。

教壇に立っている寺原先生は、腕時計の時刻を見る。

時刻は9時30分。

寺原先生、小さな声でブツブツと、

寺原先生「残念です。私は優しいから30分程、大目に見ましたが、二人とも現れませんでした。人ってそんなに変わらないんですよねえ。残念です。試合終了です。えー、それでは授業を始めます、教科書・・・」

騒がしい教室、寺原先生の話は誰も聞いていない。

城ヶ崎と美子の席には、誰も座っていない。

○ 道（朝）

美子とばあばが歩いている。

空地の近くで、城ヶ崎の原付バイクを見つける。

美子「あ！城ヶ崎君のバイクだ」

美子、原付バイクの元に駆け寄る。

美子「・・・」

○ 空地（朝）

美子とばあばが、空地に入ってきて来ると、空地の真ん中で、城ヶ崎が倒れている。

美子「城ヶ崎君！」

美子、城ヶ崎の元に駆け寄る。

城ヶ崎は、燃え尽きている。

美子「大丈夫？」

城ヶ崎「ああ」

美子「何で？どうしたの？」

城ヶ崎「どうしたの？じゃねえよ。お前こそ、学校はどうしたんだよ」

美子「・・・ごめんなさい。教室の前までは行けたんだけど、あと一步、勇気が出なかつた」

城ヶ崎「・・・何、やってんだよ」

美子「ごめんなさい。また、明日チャレンジする。城ヶ崎君は、明日、学校に来るよね？」

城ヶ崎「・・・俺は、もう。行かねえよ」

美子「え？」

城ヶ崎「高校は辞める。ていうか、辞めさせられる」

美子「どういう事？」

城ヶ崎「あの変態教師と賭けみたいな事をしたんだよ。美子が学校に来れるか、どうか的な」

美子「それで、私が学校に来れなかったから、城ヶ崎君が辞めさせられるの？」

城ヶ崎「ああ、まあ、それは気にすんな」

美子「ごめんなさい。ごめんなさい」

城ヶ崎「別にいいよ。天下統一戦で、こんなにも無様に負けたんだ。もう、どっちみち北高にはいられねえよ」

美子「そんな事ないよ。誰も城ヶ崎君の事を責めたりしないよ」

城ヶ崎、腕で目を隠す。

城ヶ崎「・・・龍一郎、ガツカリしているよなああ」

美子「・・・誰ですか？その人は？」

城ヶ崎「俺の一番の親友だよ。でも、あいつバカだからバイク事故で死んでしまった」

美子「・・・」

城ヶ崎「あいつの為に、絶対に絶対に、この天下統一戦は勝ちたかったんだ。でも、俺、あいつとの約束を守れなかった」

美子「きつと、龍一郎さんは、城ヶ崎君に、“よくやった”って言ってくれると思いますよ」

城ヶ崎「そんな訳ねえだろ！」

美子「……」

城ヶ崎「人間には、絶対に勝たなきゃいけない瞬間つてもんがあんだよ！男とか女とか、関係ねえよ。勝たないといけないんだよ」

美子「……」

城ヶ崎「……俺、勝ちたかった」

美子「……これ、作ったの」

美子、ポケットから“交通安全”のお守りを渡す。

城ヶ崎「……今、渡すもんかよ」

○ 地方都市の風景（朝）

T「水曜日」

○ 市野瀬家・美子の部屋（朝）

制服姿の美子、鏡の前に立っている。
美子、小さく気合いを入れる。

美子「……シャツ！」

○ 同・玄関

美子、靴を履き立ち上がる。

ばあばが美子の元に来る。

ばあば「じゃあ、行こうか」

美子「ばあばは、ここで大丈夫だよ」

ばあば「え？」

美子「ありがとう。後は一人で大丈夫だから」

ばあば「そう・・・いってらっしゃい」

美子「いってきます」

美子、家を出る。

○ 北高・廊下（朝）

騒がしい廊下。

美子、教室の入口の前で立ち止まって
いる。

美子「・・・」

美子、自分の足元を見て、小声で、

美子「人間には、勝たなきゃいけない瞬間つ
てもんがある。男とか、女とか関係ねえ」

美子、深呼吸して、教室に入る。

○ 地方都市の風景（朝）

○ 北高・教室（朝）

騒がしい教室。

美子、窓際の席に座っている。

教壇には、学年主任が立っている。

学年主任「ほら、席に着きなさい。動物園か

よ、ここはホントに」

一部の生徒からは“寺原捕まったって

本当？”や“二度目なんでしょ？”

“またかよ”と言われている。

学年主任「寺原先生の事は、忘れていいから」

美子、いくつか空いている席を見ている。

美子「・・・」

○ 市野瀬家・リビング（朝）

ばあば、食卓の椅子に座っている。

時計の時刻は朝の10時。

玄関のドアが開く音がする。

ばあば「帰って来た」

ばあば、玄関へと向かう。

○ 同・玄関

ばあば、玄関に向かうと、美子が立っている。

ばあば「おかえり、美子」

美子「ただいま」

ばあば「どうだった？」

美子「うん・・・まあまあかな」

ばあば「そう。ちよつとずつでいいのよ。焦らず、ゆっくり、自分のペースで」

美子「うん」

ばあば「城ヶ崎さんは？」

美子、顔を横に振る。

○ 同・美子の部屋（朝）

美子、椅子に座り勉強をしている。

美子「・・・」

家の外から、聞いた事がある原付バイク

クのエンジン音が聞こえる。

美子「！」

美子、急いで部屋を出る。

○ 同・前

美子、家から出てきて道に出ると、原付バイクに乗った城ヶ崎が、遠のいていく。

美子、城ヶ崎の背中を見ている。

美子「・・・」

美子、足元に封筒が置いてあるのに、気づき、封筒を拾う。

封筒の中には、手紙が入っている。

美子、手紙を読み始める。

城ヶ崎の声「美子へ。俺は直接、何かを言ったり、伝えたりするのはダサいと思っているから、今、こうして手紙を書いている。お前にプリントを届けるっていうのは、正直めんどくさいし、もう一度やれって言われたら絶対にやらないと思う。でも、正直、

やって良かったと思う。お前と出会えたから。だけど、これからは自分の力で、プリントを受け取りに行け。お前だったら、出来るはずだ。俺は天下統一戦で負けたから、この街には住めなくなった。だから、こうして別れの手紙を書いている。俺とお前は、何もかもが違う。身分の差もある。きっと会う事も無くなるだろう。でも、もしどこかで、会ったりしたら、ビビらずに声をかけて欲しい。俺も遠慮なくお前に話しかける。久しぶりだから、きっと話をした事がたくさんあるだろう。まあ、いろいろと書いたけど、結局、何が言いたいかと言うと、俺は美子の事が好きだし、離れていても仲良くして欲しい。ただ、それだけだ」

○ 道（朝）

どこまでも続く一本道。

城ヶ崎拓海は、原付バイクを走らせている。

城ヶ崎の声「お前がお守りしてくれたから、お返しに、この手紙を書いた。よく分かんねえけど、このお守りがあれば、死ぬ事はなさそうだ。ありがとうな。城ヶ崎拓海」

原付バイクの鍵には美子が作った“交通安全のお守り”が付けられている。

城ヶ崎「・・・」

(終)